

書く・話す技能の育成のための英検・TOEICの有効利用について

田村 聡子*

Akiko Tamura

The Effective Use of Eiken and TOEIC to Nurture the Writing and Speaking Skills of Students

Abstract - The university Testing Center Examination will be reviewed in the 2020 university examination reform. The reformed standardized test will include examinations which measure English writing and speaking skills in addition to the current tests of reading and listening. Until 2023 universities can choose the screening methods between the exams of the two skills of reading and listening or the exams of the four skills of reading, listening, writing and speaking. From the year 2024 the standardized test will consist of the exams of all the four English skills. In this paper I would like to look into the significance of measuring the four skills. Furthermore I would like to validate the efficacy of adoption of the Eiken and TOEIC tests for the purpose of the English four skills, especially writing and speaking skills.

Keyword: self-expression, writing and speaking skills

1. はじめに

大学入試改革で、英語の共通テストに民間の資格・検定試験を活用した4技能（読む、聞く、書く、話す）のテストが導入される。文部科学省の高校・大学接続改革実施方針によれば、2020年度の大学入試から英語4技能テストの活用が図られる。23年度までは「大学入学共通テスト」で「読む」、「聞く」の2技能テストも平行して実施し、各大学は4技能と2技能の両方、あるいはどちらかを利用できるようにする。24年度からは4技能に一本化する。本稿では、英語教育や入試になぜ4技能が必要なのかを述べるとともに、「書く」、「話す」技能の向上のために英検やTOEICテストがいかに有効に利用できるかを提唱したい。

2. 4技能導入の意義

現行学習指導要領でも4技能の英語教育は重視されており、文科省も言語活動の重要性を強調

てきた。にもかかわらず、英語教育の現場では「読む」「書く」が主流で、「書く」「話す」はほとんど取り上げられてこなかった。その背景には①教員自身が英語を書く・話すことの経験不足②英語教育の看板としている「コミュニケーション能力」の意味が曖昧③4技能を支える認知能力の議論不足④英語で書く・話す機会がない学生はこれらを学ぶ動機がない⑤読む・聞くばかりを重視する伝統的教育観などがある。ところが実際は、英語教育や入試に「書く」「話す」を導入する明確な理由がある。これからの時代には自分の考えや意見の内容を明確にし、それを論理明快に相手に伝える方法のひとつとして、英語力を身に付けることが肝心だからである。（中西、2017、p 16）高校や大学では英語は主体的に思考、判断、表現する方法のひとつとして考えるべきであり、「書く」「話す」鍛錬が極めて重要になる。大規模な英語力調査（高3）でも、「書く」・「話す」の扱いは、「読む」「聞く」に比べてはるかに軽いのが明らかである。

表 1

英語の授業でしていること (高 3)	
英語を日本語に訳す	88.0%
文法の問題を解く	79.0%
単語の意味や英文の仕組みの説明を先生から聞く	76.6%
単語や英文を読んだり書いたりして覚える	75.9%
自分の気持ちや考えを英語で書く	34.8%
自分の気持ちや考えを英語で話す	26.3%

(注) ベネッセ教育総合研究所の「中高生の英語学習に関する実態調査2014より」

端的に文章を書き、話す力を教育に根付かせるには、入試に論旨明確な短い文章を書く記述式問題を導入して高校英語を変えることは不可欠である。「書く」「話す」、特に主体的な思考力、判断力、表現力に基づく論理明確な発信力は喫緊の課題である。

大学入試への記述式問題と英語 4 技能テストの導入は、学校教育を発信力育成に向けて転換する方策に他ならない。「読む」「聞く」ことも重要であるが、それらとともに「書く」「話す」に代表される発信力を身に付けようとする学生を育成することが肝要だ。明晰に思考し、その論旨を明快に相手に伝えられる発信力のある入学者を獲得し、教育で十分な知識と技能を注入して、卒業後は 21 世紀の社会で活躍してもらう。これが今高校、大学に求められている使命なのである。(中西、2017、p16)

3. ライティング導入の意義

2017 年第1回英検からライティングの問題が導入された。まさに、「書く」という英語発信力を測る目的で導入されたものと考えられる。ライティング問題の課題は「食事をするのはレストランかあるいは家で食べるのかどちらが好いですか。」というシンプルな内容であった。これに 50 語から 60 語で簡潔かつ論理的に答えることが期待されている。解答の英文が課題に求められていえる内容が含まれているか、英文の構成や流れが分かりやすく論理的に書かれているか、課題に相応しい語彙を正しく使えているか、文構造のバリエーションやそれらを正しく使えているかの観点別採点方法が取り入れられている。模範

解答を見ながら、内容、構成、語彙、文法の観点から理想とされる解答文を考察してみる。

問題文： Do you think it is better for people to eat at restaurants or at home?

模範解答： I think it is better for people to eat at home. I have two reasons. First, you can spend time with your family. You can talk together while you cook and eat. Also food at home is healthy. At restaurants food has a lot of fat, but at home you can eat many vegetables and fruits.

この解答ではまず自分の意見を述べてから、“I have two reasons.”と言ってその意見をサポートする理由を挙げている。内容も課題に沿ったものであり、難しい語彙を使うことなくはっきりと自分の意見を述べている。重要なことは、自分の考えを自分の知っている語彙、文法をいかに有効に使って論理的英文を構成するかである。ここでは、自宅で食事を取ることを指示しているが、レストランでの食事を支持する解答文を提示したい。

提案解答： I think it is better for people to eat at restaurants. Firstly, we can enjoy something different from our daily life. Dining out is a great chance to forget about our busy daily routine work. Secondly, it is a good way to learn about some new dishes. We can add new recipes to our usual daily menus. Also we don't have to take the trouble of preparing meals and do the dishes as well.

最初に質問に対する自分の立場を決めその立場に沿った意見を提示する。そのあと、自分の立場の理由を裏づけする説明をする。上記のような A と B のどちらがいいと思うかを問うような質問の場合、A を選んだら、A がいいと思う理由や説明だけを書き、B を選んだ場合は B がいいと思う理由や説明だけを書くようにする。質問に示された問に関係のない内容を書いてしまうと論理に一貫性がないと判断されるため構成の点から減点の対象となってしまうので留意しなければならない。

英検が自分の意見や立場を明確且つ論理的に相手に伝える方法として、「書く」というタスクを

導入したことは自発的発信力を養うことを目的とした正しい改訂をしたと言えるであろう。

4. 自己発信力に向けたTOEICの有効利用

TOEIC自体に「書く」「話す」の問題は課されていないが、「書く」「話す」というタスクの育成のために有効利用できる方法がある。TOEICのリーディングに使われている短文、中文、長文は身近な話題が多く、特に手紙文やe-mail文は始めにこれからその要旨を説明する内容が続き、結論が後に来る形式になっているので論理的に書くことの模範的教材となる。ビジネス英語のための試験ではあるが日常的に使う英語が満載されている。TOEICに採用されている題材は、手紙文、e-mail文、お知らせ文、仕様書、記事やチャット会話などである。ビジネスに関する内容であるが故に簡潔かつ正確で一貫性のある英文が掲載されている。それらの英文を読むことで論理的に書くルールを学ぶことができる。また、多くの英文には日常で使用する表現が含まれておりそれらの英語表現を暗記することで実際の英作文に応用することができる。e-mail文の問題文を一例としながらいかに伝えたい内容が理路整然と構成されているか見てみたい。

After reviewing last year's budget figures, I would like to propose a few changes to this year's budget plan. If these changes are accepted, I predict that the company will reduce its operation costs by approximately 40 percent. First, I noticed that the company allocated one fourth of its total budget to purchasing office supplies. Of the office supplies that we purchase each year, paper is by far the most expensive. I think that requiring all employees to print documents on both sides of the paper will significantly cut down costs. Second, the company currently employs 200 people; however only about 150 people are needed for the company to function properly. Therefore, I propose the company reduce its workforce by 50 people before the start of the next fiscal year. I realize that this second proposal may seem drastic, but according to my estimates, if the company does not significantly cut costs by the end of

December next year, it will be forced to file for bankruptcy.

まず、はじめにこれから予算の変更をしたいという提案を述べ、そのあとに**First, Second**と変更する理由を列挙している。また、覚えておきたい英語の表現も多数含まれている。例えば、提案の仕方 (**I propose that ~**)、「(…程度)削減する」(**cut ~ by ...**)、「~によれば」(**according to ~**)、「~することを強いられる」(**be forced to ~**)などの表現は英作文においてよく使われる表現なので、課題文をよく読みその使い方を覚えておき、実際の英作文において応用できるようにしておけば大変有効である。このように、TOEICに掲載されているあらゆるタイプの問題文にはビジネス関係だけでなく日常使用するような表現文が含まれているので、それらの文をパターン化して覚え応用することによって、実際の英作文において簡潔かつ正確な表現をすることができるようになることが期待される。

5. 「話す」ための「聞く」ことの有効性

「話す」スキルの向上のためにはたくさんの英文を聞くことが大切である。そもそも相手が話していることを聞き取れなければ返事ができない。たくさんの英文を聞き、それらの英文がどのように表現されているのかを把握できなければ相手の問いかけに対して適切な返事や反応を示すことができない。普段の生活の中では英語を話す機会は皆無に近いので自発的に英語を話す訓練が必要となる。一見、「聞く」というタスクは「話す」というタスクに関係がないように思えるが実はこの2つのタスクは密接な関係にある。英検やTOEICで出されるリスニングテストは日常でよく使われる場面を設定して作られているので覚えておくと大変有用な表現が満載である。日常でよく使われている英語の表現をパターン化して覚えておけば自然とその表現に対する返答の仕方も学習できる。英検やTOEICのリスニングの会話問題はこの点において大変効果的な教材となる。リスニングの練習のためにCDを一度聞いて終わりにするのではなく、原稿を読んでどのような表現で何を伝えようとしているのかを確認し、それから流れる英文がどのように表現されているのか確認してから、そのあと、流れる英文を把握できるまで何度も繰り返し聞くことがポイント

トである。何度も聞いて覚えた英語のフレーズや文章をCDから流れる英文とともに一緒に口に出してシャドウイングすれば実際話すときにスムーズに英文が口から出てくる。英検やTOEICのリスニング問題を有効に活用し普段役に立ちそうな英語のフレーズやセンテンスを覚えておくと、テスト問題として使われた状況に近い場面に遭遇したとき自然に口から適切な英文が口から出てくるようになる。この作業を行うことによって応用力が身に付き人物描写や状況描写がうまくできるようになる。特にTOEICのリスニングは自分の意見を提示したり、相手の意見に対しての応答が問題として出されるので読まれた英文の原稿を読み、その英文を何度も聞いて音の確認作業をすることによってそれらに近い状況に遭遇したり、自分の意見を提示するときに覚えた英語がスムーズに話せるようになる。

6. 終わりに

現行学習指導要領でも「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能の英語教育は等しく重視されており、文科省も言語活動の重要性を強調してきた。にもかかわらず、英語教育の現場では「読む」「書く」が主流で、「書く」「話す」はほとんど取り上げられなかった。ところが、実際は英語教育や入試において「書く」「話す」を導入すべき明確な理由がある。それは単に簡単な英会話ができるようになるためではない。これからの時代には自分の思考内容を明確にし、それを論理的且つ簡潔に相手に伝える方法のひとつとして英語力を身に付けることが肝要だからである。「書く」「話す」ことによって、特に主体的な思考力、判断力、表現力に基づく論理明確な発信能力の育成は焦眉の急である。単に受身的に「聞く」「読む」ができるというだけではなく積極的に英語の技能を活用し、主体的に考え表現できるよう「話す」「書く」も含めた4技能を総合的に育成、評価することが重要である。

このような状況にあって、英検が新たに「書く」ことを問題に導入したことは正しい方向に向いていると言えよう。TOEICテストはビジネス英語であるが、それが故に要旨簡潔で明快な英語表現を学習することができる。論理的思考をもって解かなければ正解は得られない。また、ビジネス英

語に出題される英語は端的で理路整然としているので、それらの文章を読むことによっていかに簡潔で正確な文章を組み立てればよいのかの参考になる。また、TOEICはビジネスにおける設定だけでなく、日常遭遇する場面設定において用いられる英語表現も多数網羅されているので、それらの英語をパターン化し記憶することによって同じような状況において書いたり話したりする作業がスムーズにできるようになる。「読む」「書く」の技能を育成することは学生たちが明晰に思考し、その論旨を明快に相手に伝えられるようになるために必要なことなのである。英検やTOEICテストのような民間試験を有効的に活用することは「読む」「書く」の2つの技能を育成するための有益なツールになると考える。

参考文献

記事

安西 裕一郎 「『書く』『話す』発信力養成」
日本経済新聞 平成29年8月7日
16ページ

Webサイト

英検ホームページ
https://www.eiken.or.jp/eiken/exam/2017scoring_p2w_info.html

英語4技能試験情報サイト
<http://4skills.jp/education/innovation.html>